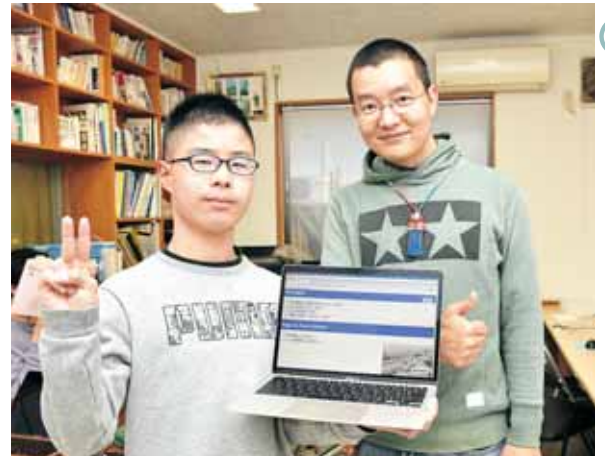




プログラミングは「自慢」と「誇り」

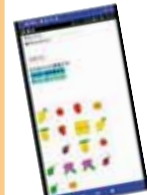


(左) 森井 健太さん (12歳) =毛屋町=
(右) 松田 優一さん (44歳) =平泉寺町赤尾=
パソコン画面は「city hall」

プログラミングを通じて、精神的にも成長しています。現在は、回覧板で回っているような情報をスマートフォンで見ることが出来るアプリ「city hall」の開発・改良に取り組んでいます。

「誰かの役に立ちたい」と勝山でプログラミングの技術に磨きをかけている森井さん。森井さんは、小学校3年生の秋にお母さんからの誘いをきっかけにプログラミングを始め、「自分の思いを形にできることが楽しい」と現在まで夢中で学び、プログラミングの全国大会などにも出場・入賞する腕前になっています。

「難しいことにもあきらめず挑戦できるようになった」と



森井さん開発のゲーム画面

「若い世代の方にも、もっと気軽に地域のことに興味をもってもらいたい」という思いで、昨年の秋から森井さんと共同で取り組んでいます。

講師をする松田さん



ガンガンいこうぜ! / 勝山ちおこ



比佐 翔太さん (35)
地域おこし協力隊

デザイン力で地域おこし

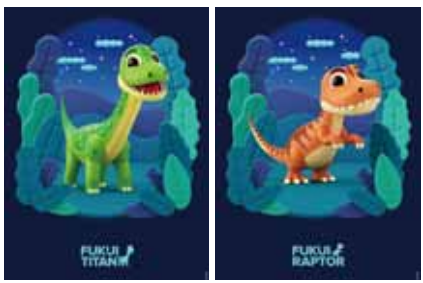
昨年4月に地域おこし協力隊に赴任して早1年。

勝山に滞在して気付いたのは①古代資源(恐竜や遺跡)②自然資源(雪や川など)③観光資源(平泉寺や越前大仏など)の3つの資源があることでした。

私が今取り組んでいるのは「これらの資源をどのようにコンテンツとして外部の人にも楽しんでもらえるか」です。

観光という単発的な関わりではなく、勝山にもう少し中長期的な関わりを持つてもらおうを増やすためには新たな人脈をつくる必要があると考えました。

そのひとつが「恐竜×クリエイティブ」プロジェクトで、デザイナーやクリエイターが勝山を訪れ、恐竜をテーマに作品制



同プロジェクトで、世界的に活躍するスペイン人デザイナー セスク・グラネさんが勝山市に滞在して制作したキャラクター

作やTシャツ・ポストカードなどの新たな商品企画を行うものです。

まちづくりで成功している地域には、おもしろい人が集まる、新しいことにチャレンジしているなどのポジティブなイメージと、かついいデザインがつきもので、デザイン力と発信力で勝山のイメージを一新したいと考えました。

この活動はまだ始まったばかりですが、恐竜でまち全体を巻き込んで仕掛けられるのは、日本全国見渡しても限られています。この「恐竜×クリエイティブ」プロジェクトで貴重な太古からの「地域資源」を、時流に合わせたカタチで発信していければと考えています。

明るいあしたは健康なアシから

JCHO-Column

2019年の暮れに始まったCOVID-19の流行は、流行が始まってからほんの数か月で全世界に拡大し、人々の生活を一変させました。歴史上の感染症パンデミックをたどっていくと、約100年前のスペイン風邪では第一次世界大戦による軍を中心とした世界的な人の往来が感染拡大の一因となったとされています。そして、この時代を遡って500年前、鉄道も飛行機もなく今ほど世界的な人の移動が盛んでなかった時代でさえ、新大陸からコロナウイルスが持ち帰ったとされる梅毒(諸説ありますがヨーロッパから地球をほぼ一周して)日本にたどり着くまでわずか20年ほどでした。このように、感染症拡大は人の往来と深くかかわっているのです。

が、足で困って受診した方はみなさん口をそろえてこう言います。「歩けないのがこんなに大変なことだとは考えたこともなかった」と。外来を受診する方々にほぼ共通しているのは、正しい靴の選び方と履き方ができていないことです。簡単にまとめてみました。



正しい「選び方」①立った状態でつま先に1cmほどの余裕がある②足を固定できるひもやマジックテープがある③かかとに芯が入っていない手で押さえてもつぶれない④正しい「履き方」①ひもやマジックテープをつま先まで緩める②靴べらを使って足を靴の中に滑り込ませる③つま先を少し上げかかとをトントンとする④ひもやマジックテープでしっかりと固定する

ウォーキングやジョギングなどで足に負担がかかる時の靴は、特に気にしてください。歩き方の場合もあります。お店でインソールの工夫や靴底の調整などで対処してもらえるとこちらもあります。靴を買う時はお店の人と長く話し合うことが大切です。

皆さん、正しく選んで履いた靴で快適な足下生活を手に入れてください。

ふるさとを訪ねて

地域文化を掘り起こそう

市史編纂室 山田 雄造

比良野家所蔵四季農耕図

野向町龍谷の比良野家は勝山藩の大庄屋を勤めた家柄で、殿様の首狩りや幕府の巡見使が村々を巡回する際には宿を勤めた。

長屋門と離れ座敷は市の指定文化財で、高位の身分の人を接待する場にならわしい建物である。8代当主の帰雲坊は、美濃派正風門の俳諧宗匠として知られ、この関係の文化財も多い。

今回は、当家が所蔵する「四季農耕図」を紹介する。

六曲二隻(一双)の屏風で離れ座敷に常時置かれているのは、春から夏にかけての水田耕作の過程を描いた一隻である。右下端に「守口筆一(印)とあり、□は景ではないかと思われる。印も含めて専門家の鑑定を待ちたいが、守景(久隅)であれば大変貴重な作品である。守景は生没年は未詳で江戸前期の狩野派の絵師である。彼の「夕顔棚納涼図屏風」は日本史の教科書には必ず掲載されている。一方、彼は多くの「四季農

耕図」も描いておりこの屏風もその一つであるかも知れない。春〜夏を描く場面は普通は右から順に土地を耕し、苗を作り、土をならし、田植えをし、田に水を廻すまでを6つの場面を描く。しかし、当家の屏風の絵はこの通りではなく、6番目の田植えはわがらが、最初の2つの場面はよくわからない。3つ目は田起こし、4つ目は牛で田をならしているように見える。5番目は馬の背に何かを積んで運んでいるようである。全体から受ける感じは日本的というより中国的な風景、しかし牧歌的雰囲気漂う。建物も含めぜひ一度ご見学ください。



屏風(田ならし)